

令和 4 年 5 月 25 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K03782

研究課題名（和文）定年退職前後の仕事、地域社会・家族との関わりの変化と高齢者の健康の関係

研究課題名（英文）The effect of involvement in work, community, and family before and after retirement on health

研究代表者

水落 正明（Mizuochi, Masaaki）

南山大学・総合政策学部・教授

研究者番号：50432034

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の分析から、引退前に一定強度（軽・中）の運動を日常的に行っていた場合や家事参加していた場合には、引退によって健康が悪化することはないが、そうでない場合には引退によって健康が有意に悪化することなどが明らかになった。引退前の生活習慣が引退の健康への効果を規定する重要な要因であると言える。ただし、引退前に社会参加活動や余暇活動が活発であった場合に、そうでない場合と比べて健康悪化することも明らかになり、さらなる検証が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

引退が高齢者の健康状態に与える影響については一致した見解が得られておらず、本研究はその原因として引退前の生活習慣という視点から影響の不均一性を考慮し、引退に多様な効果があることを明らかにした。特に、運動習慣だけでなく家事参加など、一見、健康とは関係が薄いように見える要因も、引退が健康に与える影響を変える可能性があり、そうした面からも高齢者の健康を改善させることができることを示したことは、一定の学術的・社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study shows that individuals those who had engaged in exercise (light or medium intensity) or had participated in house chores do not experience significant health decline after retirement, however, those who had not engaged in exercise or had not participated in house chores experience significant health decline after retirement. These results suggest that lifestyle prior to retirement is an important factor to determine the effect of retirement on health. However, this study also shows that individuals those who had engaged in social and leisure activities experience more health decline after retirement compared to those who had not. This indicates that further investigation is needed.

研究分野：労働経済学

キーワード：高齢者 引退 健康 因果推定 縦断調査

1. 研究開始当初の背景

わが国は世界に類を見ない超高齢社会に足を踏み入れている。そうした中、社会保障制度とりわけ医療財政の持続可能性を高めるためには、高齢者の健康状態を適切に予測し、そしてコントロールする必要がある。

高齢者の健康状態に影響を与えうる重要な要素として、仕事からの引退がある。すなわち、仕事が主の生活から仕事に従あるいは無い生活へ移行することで、心身の健康状態が悪化する可能性がある。あるいは、身体的な負担が大きかったり、ストレスフルであったりする仕事から離れることで健康状態が改善する可能性もある。こうした引退行動が心身の健康状態に与える影響について、国外でもこれまで多くの研究が行われている (Behncke, 2012 など) が、健康状態を改善するのか、あるいは悪化させるかについては結果が分かっている。

このように一致した見解が得られていない原因として、引退前における家族や地域社会との関わりなどの媒介的な要因が、十分に考慮されていないことがあげられる。水落 (2022) では、定年退職前後で家族との関係が大きく変わっていく様子が捉えられており、そうした変化は、その後の健康に影響を与えると考えられる。しかしながら、Hashimoto (2013) も指摘するように、こうした引退過程における家族や地域社会との関わりが、健康に対する引退効果にどのように影響しているかについて十分には研究されていない。

2. 研究の目的

高齢者の健康状態を変化させることは容易ではなく、もし健康状態を良い状態に保ちたいければ、引退前の段階で介入するのは1つの重要な方法であると考えられる。そこで、引退前の健康維持活動や地域社会・家族との関わりによって、引退が健康に与える影響が異なるのかを明らかにする。こうした影響を明らかにすることは、定年延長やワーク・ライフ・バランス推進などの政策的介入が、高齢者の健康状態にどのような影響を与えるかについて、議論する材料を提供することになる。

3. 研究の方法

本研究では、「中高齢者縦断調査」(厚生労働省)を用いて分析を行った。この調査は平成17年から50-59歳を対象に開始され、毎年1回、同一人物に繰り返し調査を行っており、引退前の健康活動や地域社会、家族との関わりを把握でき、引退がその後の健康に与える影響がそれらの媒介要因とどのような関係にあるのかを把握できる貴重なデータである。

本研究では、記述的な分析や平均処置効果推定による予備的な分析を行ったあと、操作変数法による因果推定を行っている。引退と健康には内生的な関係(引退と健康の同時決定関係および観察できない特性による引退と健康への影響)があることが知られており、その関係性を考慮しないで推定した場合、引退が健康に与える影響にはバイアス(偏り)が生じ、影響が正しく推定されないという問題がある。そこで、本研究では操作変数法を用いて内生性の問題に対応した推定を行った。従属変数である健康指標については、健康を多面的に捉えるために、主観的健康、身体的健康、精神的健康を用いている。主観的健康は6段階評価を2値に分け、悪い場合に1、良い場合に0と変数化している。身体的健康は、歩く、ベッドや床から起き上がるなどの日常的な活動に困難を感じている場合に1、感じていない場合に0と変数化している。精神的健康は、日本版K6のスコアが5以上の場合に1(抑うつ症状がある)、0(症状がない)と変数化した。推定作業においては、引退の短期的効果と長期的効果を分けて推定しているが、以下の研究成果の節では、より重要な長期的効果についてのみ記載する。引退が健康に与える短期的効果を含む結果の詳細については、Mizuochi (2021) を参照されたい。

4. 研究成果

(1) 本研究では、これまで注目されてこなかった、引退前の健康維持活動や地域社会・家族との関わり方によって、引退が健康に与える効果が異なることを明らかにした。いくつかの引退前の要因を考慮した分析を行ったが、本報告書では、その中から興味深い結果が得られた6つの要因について記述する。以下、(2)軽度の運動(息がはずまない程度)の有無、(3)中程度(多少息がはずむ程度)の運動の有無、(4)余暇活動(趣味や教養など)の有無、(5)社会参加活動(地域行事など)の有無、(6)近隣との付き合いの有無、(7)家事参加の有無、の順に記述している。

本研究で得られた知見として、引退前に一定強度(軽・中)の運動を日常的に行っていた場合や家事参加していた場合には、引退によって健康が悪化することはないが、そうでない場合には引退によって健康が有意に悪化することなどが明らかになった。引退前の生活習慣が引退の健康への効果を規定する重要な要因であると言える。ただし、引退前に社会参加活動や余暇活動が活発であった場合に、そうでない場合と比べて健康悪化することも明らかになり、さらなる検証が必要であると言える。

(2) 引退前の軽度の運動の有無別に、引退の影響を記述的に見ると、運動していなかったグループでは、主観的健康と身体的健康が悪化し、精神的健康には変化ないように見える。運動していたグループでは、長期では主観的健康と身体的健康が悪化しているように見える(図1)。操作変数法による推定では、運動をしていなかったグループで、引退が主観的健康を悪化させるものの、運動をしていたグループでは有意な影響は確認されなかった。

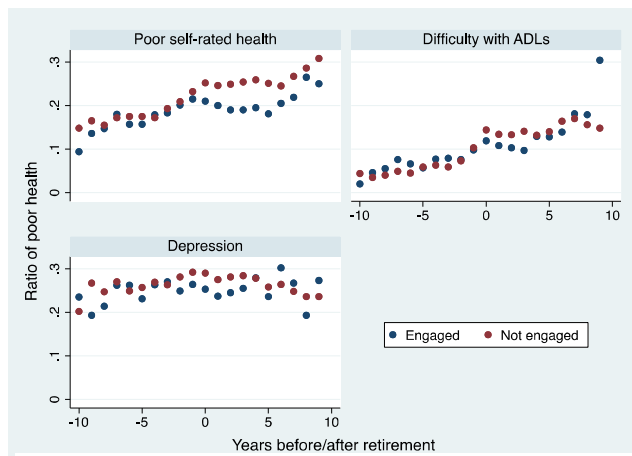


図1 軽度の運動

(3) 引退前の中程度の運動の有無別に、引退の影響を記述的に見ると、運動していなかったグループでは、主観的健康と身体的健康で引退後に悪化しているように見えるが、精神的健康には変化はあまり見られない。運動していたグループでも、同様の変化になっているように見える(図2)。操作変数法による推定結果では、運動をしていなかったグループで、引退が主観的健康と精神的健康を有意に悪化させるものの、運動をしていたグループでは有意な影響は確認されなかった。

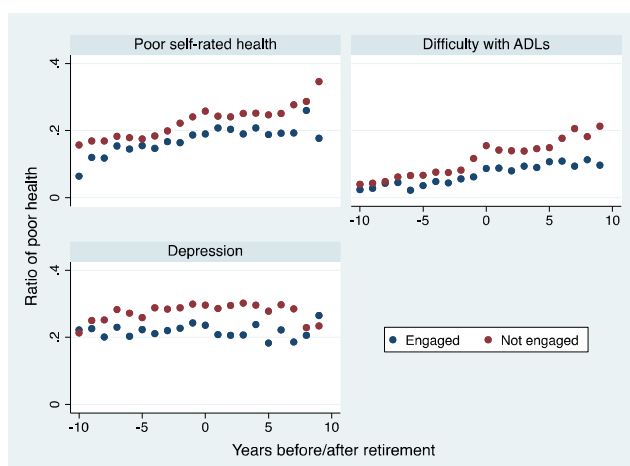


図2 中程度の運動

(4) 引退前の余暇活動の有無別に、引退の影響を記述的に見ると、いずれのグループにおいても、主観的健康と身体的健康は悪化し、精神的健康については、長期的には改善しているように見える(図3)。操作変数法による推定結果では、余暇活動に参加していたグループで、引退が主観的健康と精神的健康を有意に悪化させるものの、参加していなかったグループでは有意な影響は確認されなかった。

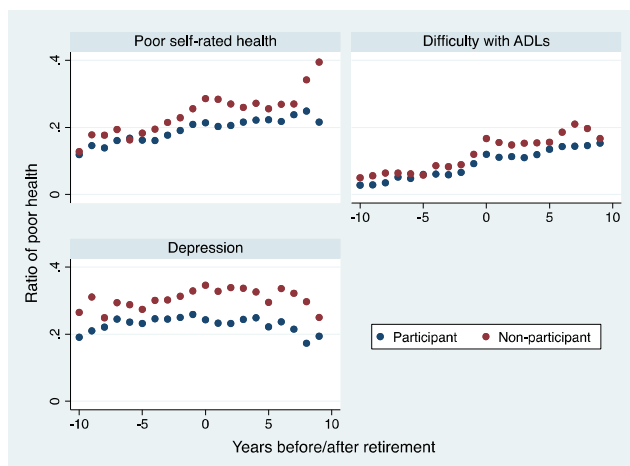


図3 余暇活動

(5) 引退前の社会参加活動の運動の有無別に引退の影響を記述的に見ると、いずれのグループでも主観的健康と身体的健康が悪化しているように見える。精神的健康については、参加していなかったグループで変化はなく、参加していたグループで改善しているように見える(図4)。操作変数法による推定結果では、参加していたグループで精神的健康が有意に悪化するものの、参加していなかったグループでは有意な影響は観察されていない。また、参加していなかったグループで、身体的健康が改善することも明らかになっている。

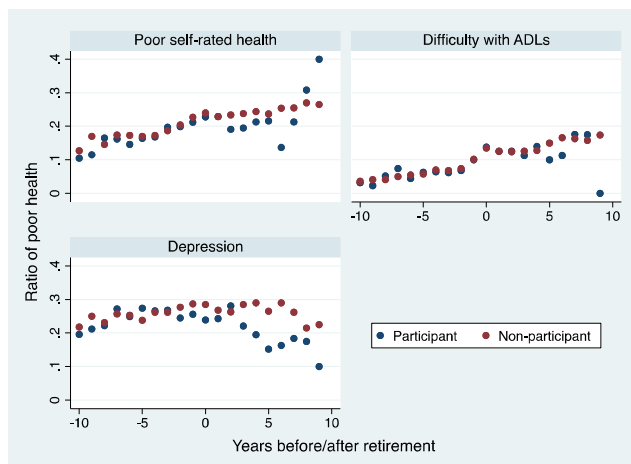


図4 社会参加活動

(6) 引退前の近隣との付き合いの有無別に、引退の影響を記述的に見ると、いずれのグループにおいても、主観的健康と身体的健康は悪化し、精神的健康については、長期的には改善しているように見える(図5)。しかしながら操作変数法による推定結果では、いずれのグループにおいても、引退が健康に与える影響は有意とならなかった。

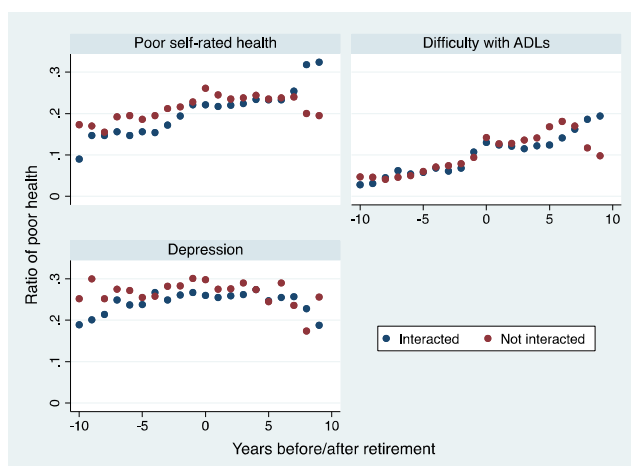


図5 近隣との付き合い

(7) 引退前の家事参加の有無別に、引退の影響を記述的に見ると、いずれのグループにおいても、主観的健康と身体的健康は悪化し、精神的健康については、長期的には改善しているように見える(図6)。操作変数法による推定結果では、家事参加していなかったグループで、主観的健康と精神的健康が有意に悪化するが、参加していたグループでは、有意な影響は確認されなかった。身体的健康への影響については、いずれのグループについても有意にはなっていない。

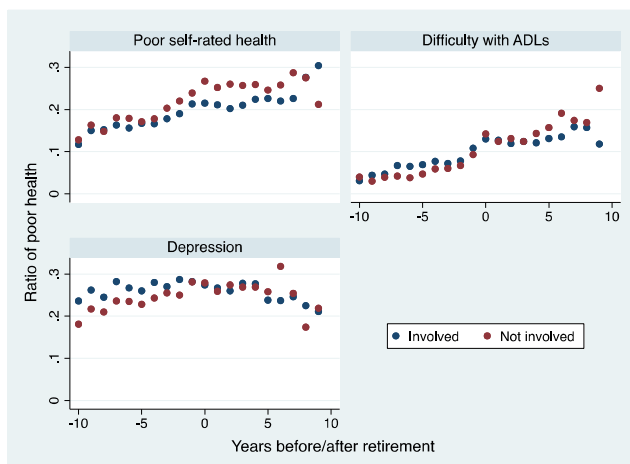


図6 家事参加

< 引用文献 >

Behncke, S. (2012) "Does Retirement Trigger Ill Health?," *Health Economics*, 21(3), pp.282-300.
 Hashimoto, H. (2013) "Health Consequences of Transitioning to Retirement and Social Participation: Results based on JSTAR panel data," *RIETI Discussion Paper Series* 13-E-078.
 Mizuochi, M. (2021) *Exploring the Effect of Retirement on Health in Japan*, Springer.
 水落正明 (2022) 「定年退職を迎えると夫婦はどう変わるのか」西野理子編 『妻と夫のパートナーシップ：パネルデータによる実証』、ページ未定、ミネルヴァ書房、刊行予定。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Mizuochi Masaaki, Raymo James M	4. 巻 77
2. 論文標題 Retirement Type and Cognitive Functioning in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Journals of Gerontology: Series B	6. 最初と最後の頁 759 ~ 768
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/geronb/gbab187	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Masaaki Mizuochi
2. 発表標題 Retirement and Elderly's Health in Japan: The Effect of Working Hours and Social Activities
3. 学会等名 European Population Conference 2018（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masaaki Mizuochi
2. 発表標題 How to retire for better health: Directly from full-time work or via partial retirement?
3. 学会等名 Population Association of America 2021 Annual Meeting（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Masaaki Mizuochi, James M Raymo
2. 発表標題 Retirement type and cognitive functioning in Japan
3. 学会等名 Population Association of America 2021 Annual Meeting（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Masaaki Mizuochi	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 96
3. 書名 Exploring the Effect of Retirement on Health in Japan	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	Princeton University		